

この新たなる魔王候補に祝福を

ニラ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目が覚めると真つ暗闇の空間で、其処には自分を見下ろすように金髪の美少女が立っていた。

どこの誰かは知らないが、ついでに自分もどこの誰？

え？ 金色の魔王？

0	0	0
3	2	1
22	11	1

目次

「いい加減に起きなさい、幾らなんでも寝すぎよ」

急に掛けられた声に、俺はハッ！として飛び起きてから視線を彷徨させた。

その声自体が呼び声にでも成ったのか、急激に覚醒していく意識。

——念の為に言っておくが、何も頭を蹴られたことが理由で目覚めたわけではない。

ないっつら、ない。

自身の五感を通して、徐々には有るが周囲の情報が俺の中へと入ってくる。

その場所は暗い。それはもう、途轍もなく暗い場所だった。辺り一帯を深い闇に覆われ、だというのにどういいう訳か酷く眩い。

何を言ってるのか解り難いかもしれないが、心の奥底に響く、身も心も凍りつくような恐怖と、そして心を熱くさせるほどの憧れと羨望が縋い交ぜに成ったような奇妙な感覚。

それが、俺の心と視界を覆っているのだ。

だから此処は、酷く暗くて、酷く眩い。

だが……何故、俺はこんな場所に？

「ふーん……理解が速いのね、あなた。でも、『こんな場所』っていうのは言いすぎじゃないの？」

俺が頭の中で色々と考え込んでいると、最初に声を掛けてきた人物——いや、人物という表現が正しいモノなのかは解りかねるが、兎も角、その相手が再び声を掛けてきた。

もつとも、俺はその相手にどう対応すれば良いのか判断がつかず、ただただ

「……誰だ、アンタは？」

としか、言うことが出来なかった。

視線を向けた先に居るのは、見たところ普通の少女。

金色の長い髪の毛を持ち、あらゆる物に希望を持ちながら、あらゆる物に飽いているような不思議な瞳をした少女であった。

そしてどういう訳か、この少女からは自分がこの場所で感じた感覚を強く、いや寧ろ、この少女を中心にして強く感じる。

これは、この少女は、何か別のナニかではないだろうか？

俺は瞬間的に、そう感じていた。

「ウフフ、誰……か。難しい質問ね、それは。色々な呼び名が有るけど……L<sup>エル</sup>って呼ばれることが多いかしら？」

「L<sup>エル</sup>？」

相手は妙に柔らかな笑みを浮かべながら、自身の名前を告げてくる。L？ ……エル……。どつかで聞いたことがある気がするが。

さて、何処だったか？

「あら？ 私のこと知っているの？」

「いや、会ったことはない筈だ。流石にコレだけ印象に残る相手なら、忘れるわけがないだろうからな。……ただ」

『L』と呼ばれた名前には、何か聞いたことが有るような気がする。

……短い名前だし、何かの略称として聞いたことが有るのだろうか？

しかし、俺は考えている事を口に出したりでもしたか？

なにやら口にしてない部分まで、Lの奴は返答している気がするんだが？

「——いいえ。貴方は何も喋ってはいないわ。でも、解るわよ。私には」

……は？

何言ってるんだ、コイツは——

「コイツだ……っ!？」

ふと、俺が一瞬だけ頭の中で思ったことに反応を示してくるL。

え？ ……なんだ？ ……冗談じゃないのか？

「ふん！ 冗談なんかじゃあないわよ。私には、これくらいの事どうということはないんだから」

腰に手をやり、(無い)胸を張るようにしながら言い放つエル。

……成る程。どうやらこのエルとか言う少女は、やはり見た目通りの人物ではないようだ。

実際は、そう見えるだけの『別の何か』というのが正しい存在なの

だろう。

「……別の何かって、止めてくれない？ その言い方」

しかし、なあ。残念ながら他の言い方が思い浮かばない。

「普通にエルってだけでいいでしょ！ それと、会話するならちゃんと口に出して喋りなさいよ！」

そう言うならば、俺が思ったことに反応するのを止めればいいのでは？

「——それは普通に会話してるみたいに聞こえてるから……ああ！

もう！ 解ったわよ！ 暫く貴方の心を読むのは止めるから！」

「そういう言い方をされると、まるで俺が無理矢理に言うことを聞かせたみたいなんだけど？」

「似たようなもんでしょ！」

そうかあ……？

どう考えても、Lの一人芝居にしか見えないのだが。

とは言え、マトモにやりとりが出来るというのならソレに越したことはない。

「じゃあ、改めて宜しく。L」

「ええ、宜しく」

ニコツと微笑みながら、Lとガツチリ握手を交わす。

瞬間、『柔っこいなく』とか、『コイツ、すっこい美人だなく』とか考えるが、今のLは俺の心を読んで居ないらしいので——つてツ!?

「……………」

やたらとニヤニヤしているLが目の前に居る。

コ、コイツ、おい！ 心を読むのを止めたんじゃないのか！

「——つ!? ……さ、さて、お互いに友好を誓ったということでは……」

途端にビクツと肩を震わせて、コホンとワザとらしい咳払いをするL。読んでませんよ——聞いてませんよ——つてことをアピールしているのだろうか？

だとしたら演技が下手くそすぎる……。

「ところで……ねえ、ちょっと聞きたいことが有るんだけど？」  
ふと、Lは此方を見上げるようにしながら質問をしてきた。

……コイツ、随分と身長が低いからな。どうしてもこう言う、あざとい視線の向け方をしてくるんだろう。

しかし、聞きたいこと？

いったい何を聞きたいというのだろうか？

「私が聞きたいのはね。……ズバリ、貴方の名前よ！」

ドーン！ と、指を突きつけて言ってくるエル。

なんだ、何かと思えばそんなことか。

しかし、まあ、それはそうかもだよな？

本名では無いだろうがLの方は名乗っているのに、俺のほうが名乗らないなんてのは、ちよつとだけ不公平だ。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺は——……あ」

「俺は？」

「チョット待ってろ、変に急かすな……！ ええつと……名前は」

ニコニコツと笑みを浮かべながら言ってくるLに、俺はピシいつと固まって動きを止める。

そして眉間に皺を刻んで、言葉の続きを絞り出そうとするのだが。

……なんだ？ 続きが、出てこない？

「あ、俺は……えつと……あれ？ なんでだ？」

「あらあら？ どうしたのかしら？」

Lと名乗った少女に対し、自己紹介を返そうかと思ったのだが……不思議とアレ？ と首を傾げる事になってしまった。

何故つて？……名前が、出てこないのだ。

そんなバカな事があるか——と、思い出そうとするのだが、やはり名前は浮かんでこない。

頭の中、記憶の奥の奥にしまい込まれてしまっていて、何故か自分の名前が思い出せないのだ。

「あらあら、もしかして、自分の名前が思い出せないのかしら？」

自分が解らない——といった、俺からすれば結構大問題な出来事なのだが。直接関係がないからだろうか、Lの奴はニヤニヤと面白そ

うに笑みを浮かべている。

—他人事《ひとごと》だと思つて、随分と好き勝手にしているじゃないか。

「——まあ、仕方がないわね。今はともかく、元が人間だもん。こうして私の前に居ること自体が奇跡なのだから。名前の1つや2つくらいは無く成るでしょう」

「……なんだよ、それ?」

「それくらい、在り得ないことに貴方はなっちゃってるってことなのよ」

ニコニコと楽しそうにしているLは、徐にパンパン——と手を叩いた。

すると

「——お呼びでしょうか、L様」

突然、俺とエルの横合いから声が響く。

驚いて視線を向けると、何と言うべきなのか……空間が歪んで居る?

その光景に驚き眉間に皺を寄せると、その歪んだ空間からニュツと腕が生えてきた。次いで顔、上半身と、気が付くと人が一人姿を表したのだった。

見た目としてはメイド。

しかしそれは格好だけで、その表情はまるで殺し屋か何かだ。少なくとも、普通の仕事を生業にしているとは思えないような、底冷えのする様な雰囲気醸し出している。

Lはその人物に視線を向ける。

「私、コイツとじっくり話がしたいから、チャチャツとお茶の準備してくれない?」

「——コイツ? ……この妙な奴とですか?」

「そうよ」

Lの言葉に、その人物は訝しげな視線を俺へと向けてくる。

そんな殺すような視線を向けられても、俺としては困るのだが……。



とは言え、いきなり何かをされるなんてことはないだろう——と、逆にジツと相手を見つめ返してやる。

すると相手は

「……畏まりました」

と、一言告げると再び歪んだ空間の向こう側へと消えていく。

『解った』って、お茶の準備をしてきますってことか？

「……へえ」

「なに？」

「ううん。やっぱり、貴方は普通じゃないみたいだね」

Lは楽しそうに言うのと、スタスタ歩いて移動をする、俺はそれに付いていった。もつとも、移動はあつという間。

いきなり目の前に現れたテーブルセット。そして其処には2つの席が用意されており、Lは俺に

「座りなさい」

と促してきた。

……本当にお茶会をするつもりのようなのである。

俺は言われるままに席に座ると、何処からとも無く

「どうぞ」

——と、手が伸ばされてお茶の入ったティーカップが置かれる。視線を伸ばされた手の方へと見やれば、先ほどのメイドが立っている、

「お茶菓子もどうぞ」

と、これまた睨むような視線をぶつけながら俺の前にクッキーを載せた皿を差し出してきた。

ええ、つと、有難うです。

「(チツ)」

ハハ——。

内心で舌打ちでもしてるのがアリアリと解る。

そのメイドの反応に、俺は少しばかり苦笑を浮かべた。

しかし俺に解る程度のこととは、どうやらLにも解っているようで——

「ちよつと、部下W……。笑顔が足りないんじゃない？ もう少し愛想良くしたらどうなの？」

「——ッ!? も、申し訳ありませんでした！ L様ッ!!」

一瞬、ゾクツとする程に冷えきった声で忠告をしてくるLに、メイド——部下W？ は、怯えたように平身低頭。

まあ、簡単にいえば『アクロバティック土下座』を敢行する。

それはもう、ズザザザザー!! って具合にだ。

なに？ そんなにおっかない奴なの、Lって？

「うーん……。相変わらず代わり映えのしない味ね、貴女の入れるお茶って。まあ、不味い訳じゃないから良いけどね」

「き、恐縮です……」

「——あ、貴方もほら、遠慮しないで頂いちゃっていいわよ？ コイツの用意するお茶って、それなりにイケるかから」

「あ、ああ。それじゃ遠慮無く」

相変わらず怯えるようにしている部下Wを他所に、俺はLに促されるままにお茶を一口飲んでみる。

あ、普通に美味い。

「結構良いでしょ？ 私も偶に気が向くと、部下Wコイツにお茶を入れさせてるのよ♪」

「へえ……。専属メイド、みたいなものか？」

「専属メイド？ ……ブツッ！ ク、アハハハハハ！」

何がツボに入ったのだろうか？ Lは突然に大声で笑い出した。

まあ、先ず間違いなく、部下Wを『メイド』と呼んだことが理由なのだろうが……。

とは言え、普通にメイド服を着ているし、やってることもメイドそのものだからなあ。

「アハハハ！ メイド！ メイドだつてさ！ 一応はアンタ、魔王なのね!!」

腹を抱えて爆笑を続けるL。なんだろうか？ 箸が転がっても面白い年頃なのだろうか？

チヨットだけ可哀想なモノを見る視線に成ってしまうが、それは少

し他所においておこう。

今しがた、Lは興味深いことを口走ったぞ？

確か、そう、『魔王』と。

俺はLに魔王と呼ばれた部下Wに目を向けると

「……L様、もうソレくらいで」

と、大笑いを続けているLを諷めるように声を掛けていた。

しかし

「は？ なに？ なんなの？」

「すいません！ ごめんなさい！ 申し訳ありません！」

と、底冷えするようなLの視線を叩きつけられた部下Wは、再びアクロバティック土下座を行って、額をガンガンと床に打ち付けだした。

オイオイ……。もうその辺で止めたほうが良いんじゃないか？

そんなことしたら割れるぞ、床が。

——あ、罅ひびが入った。

「ああ、はいはい。もう良いわよ。……全く、何かって言うのと直ぐにこうなんだから」

そんな『つまんなーい』みたいな言い方するなや。

あの人、めちやくちや怯えてるぞ？

「なあ、ところで、ちよつとだけ気になるんだけど良いか？」

「うん？ 何かしら？」

既に土下座の部下Wには興味が無いのか、エルは俺の方へと向き直って視線を向ける。俺は土下座中の部下Wをチラッと見る。

非常に、本当に非常くくに聞き難いのだが。

「さっき言ってた、この人、さっき魔王って？」

「ああ、——ウフフツ！ ……うん、この『メイド』ね。確かに魔王よ」

「それって、漫画とかアニメとかゲームとかに出てくる魔族の王様って奴のことか？」

「そうね、種類としては同じ様なものじゃないの？ ええっと、確かコイツは……白霧デス・フォッグって呼ばれてるんだっただかしら？」

「ですふおつぐ？」

「ええ」

聞き返した俺に、Lはニコツと微笑みながら頷いてくる。

しかし、俺は部下Wの呼び名に違和感というか……やはりちよつとした聞き覚えを感じていた。続けるように

「白霧……」

と口にして、口元へと手をやって考えてみる。

すると、フツ——と、とある名前が浮かんできた。

それは

「蒼穹の王、闇を撒くもの、赤眼の魔王……そして、白霧……！」

次々と脳裏へと浮かんでくる名前の数々。

不思議な事であるが、俺はやけにスンナリと其の名前を口にした。

何故だ？ どうしてそんな名前が思い浮かぶ？

「へえ、自分のコトは思い出せないのに、私たちのことは知ってるんだ？ 丁度いいけど……本当に面白いわね」

ニイツと笑みを浮かべているLに、俺はそれでも訝しげな表情を向けずには居られない。俺の思い浮かべた名前の1つ、白霧がメイド姿のこの人物だとするのなら、このLという少女は……

「金色の魔王……か？」

「フッフ、そう呼ばれることも有るわね」

相変わらずの極上の笑みを浮かべている少女は、自分のことを金色の魔王だと、そして土下座中のメイドである部下Wを魔王白霧だと言ってきた。

世界の母にして全ての母。

混沌の海その物にして世界を覆う力の意味。

最強の神魔である王の中の王、金色の魔王。

「——ッ!？」

次々と頭のなかに思い浮かぶ知識の数々。

俺はその知るはずのない知識に、思わず眉間に皺を寄せた。

訳が解らない。

なんだってんだコノ奇妙な知識は？ 解らない筈なのに、俺は『こ

の相手』を知ってるぞ？

「言っておくけど、私達は正真正銘の本物よ」

「……俺がどうやってこの状況を理解しようかと考えている所に、言葉を挟まないでくれよ」

「だって、何考えてるのかが丸わかりな顔だったからね」

「いったい何がそんなに楽しいというのだろうか？ ……まあ、愚問だったな。間違いなく俺の反応だろう。」

「Lはニヤリツと笑っていて、俺の表情の変化の一つ一つを楽しんでいるように見える。」

正直……認めたくはない。

そう、認めたくはないのだが、俺がこの場所で呼び覚まされてから感じている雰囲気。Lが、俺の心を読んだという事実、そして部下Wを含めた二人からヒシヒシと感じ続けている奇妙な感覚。

それら全てが正しいと告げているのだった。

「Lと部下Wの二人は正真正銘間違いない、本人たちが言うとおりに本物のソレであるようだ。」

もつとも、何故そんな風に思うことができるのか？ と聞かれると……正直なところ俺自身も上手く説明することが出来ない。

唯なんとなく、それが正しいことであるように思えるというだけのことなのだから。

「——解った。二人がそういった、超常的な存在だと一応は納得してみる」

「あれ？ 慌てるターンはもう終了？」

「いやだって、それじゃあ話が進まないんだろ？」

「まー、ソレはそうなんだけど。身も蓋もない言い方よね、ソレって」話を進めようと言った俺の言葉が、どうやらLには面白くなかったようだ。ふくれっ面を浮かべて、抗議するように此方をジロっと思つめてくる。

「でも、Lが金色ロード・オブ・ナイトメアの魔王だとするなら、俺がここに居る理由は何なんだ？」

「え？」

「自分のことがサツパリだというのに、何故か奇妙な知識だけは持っている俺が此処に居る理由……。Lは知ってるんだろ？」

「それは、まあね」

Lは言いながら腕組をすると、「うーん」と唸りだした。

……まさか、今から理由を考えるとかは無いだろうか？

「うーん……そうね……言うなれば」

「言うなれば？」

「暇つぶし？」

「……オイ！」

「冗談よ、冗談！ やあ〜ね、そんなに怒らないですよ♪」

本当に理由も何も無いとかじゃないだろうか？

嫌だぞ。何も意味が分からない内に、こんな状況とかは……。

「しよすが無いわね。私としては、もう少し楽しんでから核心の部分を話したかったんだけどなあ。ま、良いか」

それなりに楽しんだから——と、Lは言うど、俺の事をジツと見つめてくる。

「簡単に言っつてしまえば、新しい神や魔王の創造かな？ 厳密に言えばその何方でもないんだけど、そのために貴方の魂を引つ張つてきたつてところかしらね？」

「新しい？ 創造？ その侍従魔王みたいな？」

Lの言葉に対して、俺は今しがた御茶の準備をしてみせたメイドの事をチラリと見る。俺の知識が正しければ、デス・フォッグ白霧はLに依つて創造された魔王の一柱のはずだ。

すると俺の視線に気が付いてか、デス・フォッグメイド（白霧）は「チツ……！」なんて舌打ちをして睨んでくる。

オイ……嫌われるようなこと、何かしたか俺？

「そうそう、コイツみたいな魔王の創造ね。私が数多くの世界を創りだして、ソレを監視する存在だつていうことは知つてるわよね？」

「あ、ああ。後は、あらゆる者にとつての母のような存在だとかな」

「そう。でもね、何も全ての世界でコイツ等みたいに神や魔族で戦わせてるわけじゃないのよ？ 単純に放置しつぱなしの世界だつてあるしね」

放置しつぱなし？ それはどういう事だろうか？

知的生命体は居るが、それを見守る存在も、仇なす存在も作りはしなかつたということか？

「普段の私は、そういつつた世界のことも含めて只々眺めてるだけなんだけど、それだとちよつと刺激が少なく感じる時が多いのよね。んで、そういつつた世界の一つにテコ入れしようかな……なんて思つちやつて♪ 幸い、色々と手が入つてるみたいだし、私が横から入つたつて文句はないでしょ」

弾むような声色で可愛らしく言つてゐるが、Lは『自分が暇だ』といつた理由のために、一つの世界に神や魔王といった超常的存在を創

ろうと言っている。

……なんとも、まあ。

その世界の住人にとつては傍迷惑な話だな。

——うん？ ちよつと待て？

俺が此処に居る理由を聞いていたのに、どうしてそんな魔王だの神だの、世界へのテコ入れだのと言った話になるんだ？

「オイ、ちよつと待てし」

「まあ、ぶつちやけると、私が作った世界に行つて、魔王にでもなつて来て欲しい訳なのよ」

「ぶつちやけるな！」

待てというのに、構わず突つ切るしに思わずツツコミを入れる。

全くなんだつて言うんだコイツは？ 幾らなんでも自由が過ぎるだろうが！

「何よ、なにか不満なの？」

「何か不満つて……あのなあ」

色々好き放題に決められて、それで『はい、解りました』なんてなるわけ無いだろ。

「大体だな、俺が一人で行つたからつて世界がどうにかなんて成るわけ無いだろう？」

「なんでよ？ それなりに色々なことが出来る思うわよ？」

「出来ないだろ。俺つて記憶が変になつてるけど普通の人間の筈だぞ」

——と、当たり前前のことを告げたのだが、……何だ？

しはコテン——と、首を傾げて、俺に向かって『何言つてんだ、コイツ？』といった表情を向けてくる。

止める本当に。

お前は無駄に容姿が可愛く設定されているからか、そういった表情は結構グサツと来るんだ。

「ええつと、普通の人間？ 誰が？ ねえ、部下W。この場所に普通の人間なんて居るかしら？」

「……いいえ！ この場には其のような者は一人も居りません！」



何言ってるんだ——的な表情のままに、Lは土下座中であつた  
(まだやってたのか!?) 部下Wに問い質す。

すると部下Wは緊張したように勢い良く立ち上がり、まるで上官に  
返事をする新兵のようにキビキビと回答をする。

……: そういや部下Wコイツさつき、オレのことを妙な奴とか言ってたな。

「なんだよ、ソレじゃ俺は其処デス・フオツグに居る白霧霧みたいな、魔王にでも  
成ってるっていうのか?」

チラッと部下Wを見てみると、それに反応した奴が睨んでくる。

だから、一々睨むなつての。

「うーん、まだ魔王や神ってわけじゃないけど。ただ、規格外と言うの  
もおこがましい程の魔力のプールとバケツ、それと精霊や私達への親  
和性を持った——限りなく魔王それに近い存在ナニカって所かしらね?」

「……: ナニカつて、ソレは絶対褒め言葉じゃねえな」

「うーん、説明するのが面倒なだけだ。……: そうね。魔王や神なん  
て言われている連中が、言ってしまうえば単なる精神生命体だつて言う  
のは知ってるでしょ?」

「ああ。単なるつて所に若干の違和感を感じるが理解はしてる。変に  
そういった知識は有るみたいだからな」

Lの問いかけに頷いて返す。

元々、Lの言っている神々や魔族と言う存在は精神世界アストラルサイドに本体が  
あつて、普通の世界に現れているのは受肉化した別の身体なのであ  
る。

其のため、物質世界でどれだけ体が破損しようと痛くも痒くもな  
く、仮にダメージを与えるにしても精神世界に直接干渉ができるよう  
な武器や魔法を使わなくては成らないのだ。

俺の知っている物だと、有名な物がエルメキアブレードや光の剣な  
んかが該当する。

「物質的な世界に存在している魔族や神っていうのは、半精神生命  
体っていうのが言葉としては適当かもね。向こうの世界で働いてる  
のが影法師で、本体はコッチみたいな、ね。

で、今の貴方は、言ってしまうえば半精神生命体と同じ存在に成つて

しまっているのよ！」

「どーん！ と、効果音でも付きそうな大仰な身振りを交えながらエルは説明をしているが、なんだろうかコレは？」

俺は『な、なんだってえ！』とか言ったほうが良いのだろうか？

しかしなんだ、今の説明の内容は？

それじゃあ、まるで俺が魔族と同じみたいじゃないか。

「より正確には、人間の魂をベースに造られた、限りなく魔族や神々に近い存在って所ね。まあ、私の作った魔王だの神だのが相手なら、素材的には貴方の方がずっと上等よ？」

「それ、神や魔王としての立場がなくないか？」

「ソレくらい頑張って貴方を作ったってことよ。まあ、力が強いかどうかってのは別ん問題なんだけどね」

「今ひとつ理解が出来ないんだが。要は普通の人間よりも魔法を使い易いってことか？」

「まあ、その程度の理解の仕方でもいいわ。そういう意味でもあるからね。でもね、私との親和性が高いってのは凄いことなのよ？ なにせ私の力を使えば、其処に居るメイドなんて一瞬で蒸発させることも出来るんだから」

「L様!!」

「だって本当のことだし。まあ、今はまだ無理でしょうけど。将来的に貴方が全力が出せるようになれば、多分『他の3人』も含めて同時に相手をして互角以上に戦えるんじゃないかしらね？」

エルの言葉に対し、今までビクビクと震えているだけだった部下Wデス・フォックが声を荒らげる。更に部下Wデス・フォックは俺に向かってギロリと睨むような視線をぶつけて来た。

しかし、他の3人つてのは——他の魔王連中だろうか？ 流石にあんな馬鹿げた奴らを同時にどうにか出来るなんて、冗談でも思えないのだが。

少なくとも部下Wデス・フォックも同じ考えだろう。

エルの言葉に反発するように目を細め、俺を鼻で笑うようにしている。

「幾らなんでも、こんな産まれたての奴に私が……ヒイツ!?」

——が、急に怯えたように肩を震わせると、直ぐ様にその震えは全身へと広がっていった。

なんだか、失礼極まりない反応である。

「なツ!? き、貴様!・ そ、その瞳は!!」

指さして何やら言ってくる部下<sup>デス・フオック</sup>W。

というか、瞳? 何を言ってるんだ?

「あ、はい鏡」

疑問符を浮かべた俺に、Lが隙かさず手鏡を差し出してくる。

Lのこの素早い対応、コイツ、やりおる……。

と、冗談はさておき。渡された手鏡をのぞき込むと、其処には恐らく俺であろう人物が映しだされていた。

「眼が金色? 髪の毛が黒いのになんてバランスの悪い……って、

誰だ、これ?」

「言ったでしょ? 気合入れて作ったって。今の貴方は言うなれば私の半身みたいなものよ。まあ、厳密に言えば少し違うんだけどね」

半身? ……俺とLの共通点は、瞳の色だけだぞ?

「私の一部から分けられた私自身。そして私でありながら全くの別な存在……それが今の貴方よ」

……相変わらず良く解らないが、神話に出てくる神が持つ別の側面——神性といった事だろうか?

ヒンドゥー教の神であるシヴァ神は世界の終末を告げる破壊神であるが、日本では巡り巡って大國主命オオクニヌシと同一視されて国護りの神と呼ばれている。

破壊と守護という別の側面を持つ神であるが、元を正せば同じ神。

つまり彼女エルが言いたいことは、俺は金色ロード・オブ・ナイトメアの魔王本人ではないが、元を同じくする別人だということだろう。

しかし、

「おめでとう♪ 貴方は、人間から違うナニカに転生しました♪」

「その、妙に明るいノリを止めろ」

楽しそうにしてやがるな、コイツは。

ニヤニヤと笑いながら、パチパチと拍手をするL。

そのLに併せているのか、部下Wも睨みながらも拍手をしてくる。

……というか、嫌なら拍手するなよ。

「なあ、これって会社会的な枠組みだと、エルが不動の会長職で、他の魔王や神々が役員。だけど其処に会長の鶴の一声で、俺という新人が役員の上役に現れた——的な感じなのか？」

「そうそう、それよそれ、そんな感じ」

「でも、俺……何かが出来そうな気は全然しないんだけど？」

「ソレはそうでしょ、貴方一応は生まれたばかりなのよ？ 力の使い方も知らずに何かが出来る訳が無いでしょ？」

「む……」

「じゃあ何か？ お前は何も出来そうにない小僧を、そのまま新たな世界という、寒風吹きすさぶ荒野へと放り出そうとしたのか？」

「……それも面白そうだけど、まあ、私も別に新しい世界に急がせる訳じゃないし——部下W、ちよつと此方にいらっしやい」

「え、あ、はい」

クイクイツと指を動かして、部下Wを呼びつけるL。

なんだ？ 俺の前で、部下Wに実演させるのか？

テキパキとエルは指示をすると、部下Wを俺の向かいへと移動させる。る。

「いい、良く聞いてね。部下<sup>アイツ</sup>Wや他の魔王たち、それから神々や魔族なんかもそうなんだけど、連中は基本的には自分の持っている力を吐き出して、ソレを何らかの形に変換して現実世界に効果を表しているにすぎないわ」

「俺にもソレをやれっていうのか？」

「うーん、ソレでも良いんだけどね……。多分、今の貴方には出来ないでしょうね。力の扱いに慣れてくれば、そういった事も出来なくわないでしょうけど、最初のうちは力の扱い方を初心者用に纏めた物を使った方が良いでしょう」

「なんだよ、その初心者用の力の使い方っていうのは」

「ズバリ、魔法よー」

ビシイッ！ と指を突きつけてドヤアつと言いつつ放つ。

しかし簡単な方法が魔法とか、世の中の科学万能主義者が聞いたら発狂するんじゃないだろうか？

「一応は部下Sの世界にある魔法の基本的な理念と概要は、貴方をこつち側に引つ張ってきた時に埋め込んであるはずなんですけど？ パーになつてなければね」

「そんなこと急に言われても——あつ」

『あつ』って、反応薄いわね」

Lに言われて考えようとしてみると、確かに其のことに関しての知識が浮かび上がってきたのが解る。

それは一般的な精霊魔術から、白魔術、神聖魔術、黒魔術と多岐に渡る知識であつた。

「まあ、後は魔法の扱い方かあ……。うーん、魔力の使い方って私達からすると感覚的なものだからなあ。そうねえ、解りやすく言えば、『考えるな！ 感じるんだ！』ってことよ」

「結局そんな結論になるのかよ」

無茶を言う。

しかし、ソレくらいに感覚的な事だということなのだろう。

それに逆に深く面倒な説明をされても、途中で考えることを拒否してしまいそうだしな、俺は。

幸いにして魔法の扱い方に関しては知識としては知っているんだ、後はそれを行動に移すだけだろう。

魔力の練り方は——つと。

「あ、あのL様？ 何故私の対角線上にソイツが立っているのですか？」

「何故って、これから力の試し撃ちをするからでしょ？」

「そ、それって！ もしかして私にですか!?!」

「当たり前じゃないの」

当たり前前なことを何を今更——と言うように、Lは部下Wに言い放つ。まあ、俺も此の配置に成った時に感じてはいたんだが、ちよつとビクビクし過ぎじゃないのか？ あの魔王？

「ま、待って下さい！ どうして私がソイツの実験台なんかに!？」

「ソイツじゃないわ。今さっきだけど、ちゃんと名前を決めたから」

「え、俺の名前?」

「ええ。貴方の名前は、シルバリオ・ロード白銀の王。部下Sとイニシャルが被るから

……貴方のことは普通にシルバって呼ぶわね」

「シルバリオ・ロード白銀の王……シルバ。それが俺の名前?」

……なんだか年寄りみたいな名前だな。

いや、俺の勝手なイメージだけだな。

「さて、それじゃあシルバ。……殺っちゃいなさい♪」

「エ、エエエエエ、L様! じよ、冗談ですよね!? ね!？」

「え? 冗談なんかじゃないわよ?……大丈夫だって! アンタ、仮

にも魔王なんだから。デーモンと構えてなさいって!」

「そ……それって、仮に直撃しても大丈夫な攻撃なんですか?」

「……………」

「なにか言ってくださいよっ!？」

本気で嫌がっている部下Wの姿に、俺は思わず涙がポポロ。……恐らくは普段から、Lによってコンナ扱いを受けているのであろう。

——まあ、だからと言って俺が奴を庇ってやるということはない。だつて魔王だぞ?」

俺の頭に残っている知識? 記憶? まあ、ソレの中に有る、部下

Wと同格の魔王、赤眼ルビィの魔王シャブラニグドウの強さは、僅か7分の

1、しかも半覚醒状態でも冗談のようなものであった。

今、眼の前で本気でLに懇願をしている部下Wは、真正正銘、純覚醒のうえに分割もされていない状態の魔王だ。

俺がちよつと何かした程度では、大したことに成るわけがないだろ。

「色々と揉めてるようだけど、やってみても良いのか?」

「うん。勿論。いつでも良いわ」

「L様あーっ!？」

手を上げて、自分の存在をアピールした俺は、部下Wに大してニコ

ニコといった笑みを浮かべた。

部下Wは俺の言葉に肩を震わせると、その場から逃げ出そうと脚に力を込める。

……だが残念。ソレよりも早くエルが手を翳すと、部下Wの身体がピタリと動きを止めてしまう。

……なんだ？ と、目を凝らしてみると、何やらエルから放たれている不可視の力が部下Wを縛り付けているらしい。

まあ、不可視の力なのに目を凝らしてとか変なコトを言っているが。

しかし俺は、そのエルの扱う力に驚きを感じつつも少しだけワクワクもしてしまう。だって、あんな不思議な力が俺にも使えるかもしれないんだぜ？

「じゃあ、シルバ。後は頭の中に浮かんでいる魔法の呪文を唱えて見なさいな」

「了解。………えーつと、あー、こうか？

——悪夢の王の一欠よ、天空そらの戒め解き放たれし凍れる黒き虚ろな刃よ——」

「——ひうツ!? それは、その力は!!」

「へえ、適応能力が高いわねえ♪」

力の込められた言葉を口にする、自身の体を中心に金色に輝く黒い力が集まってくるのを感じる。

俺はその力を制御し、自身の掌に向かって集めていった。

「——我が力、我が身となりて、共に滅びの道を歩まん。神々の魂すらも打ち砕きツ!——」ラゲナブレイド 神滅斬ツ!」

呪文の詠唱を終えた俺は、一呼吸を置いてから最後の言葉を口にする。

瞬間、その進むほどの力は黒いエネルギーとなって掌から溢れ出し、バチバチと放電するように唸りながら巨大な剣の形へと変化した。

ロード・オブ・ナイトメア 金色の魔王、世界の根源たるLの力を用いて産み出された漆黒の

剣。それが、この神滅斬だ。ラゲナブレイド 体から何かが抜けていく感覚を感じる

が、もしかして魔力という奴が抜けていつているのだろうか？

「さて、それじゃあ試し切りと行きますかね？」

ニコツと笑みを浮かべた俺は、ラゲナフレード神滅斬の切っ先を部下Wへと向けた。

見るからに変化していく部下Wの表情に俺は少しだけ面白そうに笑みを浮かべてしまう。

でもまあ、大丈夫だろう。

だって相手は魔王だぞ？ 俺がちよっと魔法で何かしたくらいじゃビクともしないさ。

ラゲナフレード振り上げた神滅斬の刃を、俺は自分に言い聞かせながら勢い良く振り下ろしていくのだった。



眩しい。眩い光が俺の視界だけでなく、体全体を覆っている。不意に感じた浮遊感。そしてその後足裏に感じた地面を踏みしめる感触。

気が付けば世界を覆わんばかりの光はなりを潜め、俺は広い平原にポツンと立っていた。

もつとも、

「……なんだ、コイツ？」

目の前には見上げるほどの巨大なカエルが立っていたのだが。

……ジイッと、カエルと俺の視線が空中でぶつかり合った。何だか良くは分からないが、何となく視線を逸らしたら負けなような気がする。

メンチビームを喰らえ。

「ジッ………！」

「………！」

と、『ぶいっ』とカエルが他所を向く。

ふっ、勝ったな。

虚しくはあるが、自身の勝利に口元をニヤリと吊り上げた。

「——危ないぞ、早く逃げろ！ 何やってるんだ！」

カエルとの睨めっこに集中していたせいで気が付かなかったが、何やら緑色のジャージ姿の少年が俺に向かって叫んでいた。

(この世界にはジャージがあるのか……)

なんて、のほほんと考えていたのだが、少年のその表情は随分と切羽詰っていて、かなり真剣な様子だ。

だが逃げろと言われても、いったい何から逃げろというんだ。

周りには他のカエルも居ないし、精々が周りの空間が不思議とキラキラしてるくらいだ。

「キラキラ？」

……何が光ってるんだ、コレ？ 訳が分からず、輝く何かの動きを追って視線を空へと向ける。

すると其処には、幾つかの輝く魔法陣が浮かんでいて

「——あつ」

空から、熱い何かが落ちてきた。

※

「……………はっ!？」

急に意識が覚醒して、飛び跳ねるように起き上がる。

何があったのか良く覚えていないが、辺りを見回すと何かの爆心地の様な地面と、目の前で土下座をしている3人組が目に入った。

青髪に青い服装が特徴的なヌルヌルの粘液塗れの女。魔法使いのようなつば広帽を被ったヌルヌルの粘液塗れの女の子、そして緑のジャージを着た少年の3人である。

まあ、より正確に言えば魔法使い風の女の子は土下寝の状態だったが。

いや、いったい、コレはどういう状況なのだろうか？ 正直な話、ちよつと記憶があやふやでよく分からない。

「……………すいません。本当にすいません」

首を傾げ、どんな状況なのかを把握しようとしたのだが。最初に出てきたのは少年の謝罪の言葉である。

「イキナリだったとはいえ、とんでもない事をしてしまいました。本当にすいません」

目の前の少年が何に対して土下座をしているのかよく分からないが、人間誰しも間違えくらいは有るだろう？

と、そう言つて土下座を止めさせる。

「けど、あんな事に巻き込んで怪我とか……………」

怪我？ 「うーん……………」と唸りながら自身の体を隈無く調べてみる。手首も回るし、足首も回る。ラジオ体操も出来そうだから大丈夫だろう。

そう笑顔で伝えたら、何やら奇妙な物を見るような視線を3人から向けられた。

怪我してなくちゃ、駄目だったのか？

「ま、まあ、何処も異常が無いならそれに越したことはないか。けど、おい、めぐみん。爆裂魔法の威力が凄いのは分かったけど、魔物と一緒に他所の人を巻き込むなよな」

「わ、私はちゃんと周囲を確認しましたよ！ ですが、どういう訳か魔法の爆心地にこの人が居ただけで」

「おい、じゃあ何か？ この人が瞬間移動でもして、わざわざ爆裂魔法の爆心地に移動してきたとでも言うのかよ」

「流星に、そこ迄は言いませんけど」

少年の言葉に、紅い瞳の少女はうつ伏せに寝転がりながら反論をする。

二人の会話から察するに、俺の失った記憶に関連する内容のようだ。

爆裂魔法とやらが何なのかサツパリだが、視界の隅に写ってる何かの爆撃跡は関係が無い事を切に願う。

「ねえ、そんな事より。——貴方、本当に何ともないわけ？ めぐみんの爆裂魔法って、下手をしたら女神である私でさえも『チョット危ないかも』ってレベルの威力なんですけど」

ジロっと疑うような視線を向けて来るのは青い髪の女だ。——  
けど、女神？

「——を自称してる可哀想な奴だから。あまり深く考えなくてくれると有り難い」

「……成程、可哀想な人なのか」

「アクア。初対面の人の前で、自分の事を女神なんて名乗るのは止めた方が良いと思いますよ」

「ちよっ!? 何よそれ！ 私は女神だって言ってるでしょ!」

騒いでいる青髪女性をジッと見つめてみる。すると微かにだが、Lの所にいた部下の人に近い雰囲気を感じる。

もしかしたら女神というのも、あながち嘘や冗談では無いのかもしれない。

(けど、例えば本当の事でも人前で言うとかーいった視線を向けられるのか)

まるで残念な人を見るような視線を向けている魔法使い風の少女に気付き、自分は気を付けようと心に誓う。

「——フン。まあ、良いわ。所詮、ヒキニートに私の素晴らしさを理解しろという方が無理だったみたいだし」

「誰がヒキニートだクソビッチ。だいたい、ソレらしい事なんか何も出来てないだろうが。モンスターの一匹でも自力で倒してから、その偉そうな口を開け」

「何ですってー!!」

売り言葉に買い言葉……なのだろうか？

目の前の2人は互いに罵り会々と掴み合いの喧嘩を始めた。喧嘩するほど仲がいいとは良く聞かすが、喧嘩ばかりしてたら仲は悪いと思う。

二人とも、互いの頬を抓った状態で膠着している。

「——そろそろ私の美しい頬っぺから手を離れた方が良いんじゃないかしら？ そのまま続けると、私も本気でカズマの頬っぺを捻りあげるわよ！」

「やれるものならやって見ろ。ちなみに俺は、まだ全力の半分程度しか力を出しちやいないからな」

「ふ、ふふん。半分でこの程度とか、笑っちゃうんですけど。私なんて、まだ三割も出てないわよ」

「へえ、それなら涙を浮かべてないで、さっさと残りの七割を出したらどうだよ」

「カズマこそ、薄らと瞳が潤んできてるじゃない。我慢しないで泣いてもいいのよ。後で笑ってあげるわ」

「ふふふ」

「ふふふふふふ」

「いったいぜんたい、どんな意地の張り合いなのだろうか？」

「知り合い？ 友達？ 仲間？ な、魔法使い風の少女は、そんな2人のやり取りを眺めている。仕方がない。」

「——まあ、少し落ち着け。ヒキニートにクソビッチ」

「誰がヒキニートだ！」

「誰がクソビッチよ！」

「……え？ 名前じゃないの？」

「おい、常識的に考えろ。そんな名前の奴がいるわけ無いだろ」

「いやあ、エキセントリックな名前だなあ……とは、思ってたんだけどね」

「凄まじい名前を付ける親もいるもんだなあ——とは、思ったんだよ。」

「世の中、ほら、キラキラネーム？ とか、そう言うのも有るからもしかしたらって」

「思うなよ！ 疑えー！」

素直な性格なもので、申し訳ない。

すると行われた自己紹介。ジャージ少年の名前はカズマ。青髪の女はアクア。魔法使い風の少女はめぐみん。

と、それぞれが名乗ってきた。

名乗られたなら、名乗り返しましょう。

俺の生い立ちの一部始終を。

「……よく分からない場所で、金髪の女性にこの世界に行くように言われた？ 自分の名前やなんやは覚えてなくて知らない？ 取り敢えずはシルバと呼べって……」

一通りの説明を、カズマくんが要約する。

うーん。身振り手振りで10分ほど頑張った説明が、あっさりと纏められると哀しい気持ちになるな。

——？ 何だろうか？ カズマくんがアクアを手招きして少し離れていく。

内緒話をしようってか。

「（おい。アイツ、俺と同じで転生したんじゃないのか？ 金髪の奴って、お前の後釜になった天使のことだろ）」

「（ええ？ だって、私の担当は日本よ。あの髪の毛は、どう見ても日本人じゃないでしょ）」

「（特典で、何かソレっぽいものを貰ったとか。記憶が無いとか言うの

も、確か、お前、文字や言葉を脳に刻むと運が悪いとパーになるとか言ってただろ)」

「(……………っ!? ちよ、ちよつと待ってよ。そ、その可能性は無くはないけど。その、あの)」

ボソボソと内緒話をしている所、大変恐縮ですが。スマンな。俺の耳には丸聞こえだ。

多分、色々と思うが、言い出すと面倒そうなので何も言わない。

空気を読む能力——とか言うと、何故だか凄い技に思えるから不思議だ。

「——あーその、なんだ。色々と迷惑を掛けちゃったみたいだし、良かったら飯でも奢ろうかと思うんだけど……。どうだ？」

アクアとの内緒話を終えたカズマくんが、眉間に皺を寄せて、よく分からない笑顔を向けながら言ってくる。

この表情を、なんとさえばいいのか？

しかし、なんだ。俺を懐柔しようと言うのだろうか？ 俺を食事程度で意のままに操れると思ったら大間違いだぞ。

※

ガツガツガツガツ!!!

何とも漫画的な擬音が似合いそうな程に、俺は目の前の食事に貪り着く。

いや、腹が減ってるのか？ と聞かれても困るんだが、どうやら俺は食事が好きな質らしい。

「よく食うのな、お前……」

腹が減っては戦ができぬとか言うじゃないか。まあ、戦なんてする気は無いけど。

「もにゅももにゅももにゅにゅもむももむも」

「何言ってるのから分からないから、ちゃんと呑み込んでから話せ」

カズマくんの指摘に頷いた俺は口に入れてある分を良く噛んで呑

み込み、次の料理へと手を伸ばそうとした。しかし、

「新しく食おうとすんな！　まずは喋れや！」

と言われてしまった。仕方がない。

「……………ここに来るまでの間に、ヌルヌルがどうしたとかめぐみんが言ってたけど。どー言うこと？」

「おい！　その部分を引っ張り出すな！　…………単に、俺とアクアのパーティに入れてくれて話だよ」

「パーティって、仲間？」

「一緒に依頼を受ける、冒険者仲間のことだよ。俺達は、この街で冒険者をやってるんだ」

ふーん。冒険者、ねえ。

俺はてつきり、外に出るのを嫌がる引きこもり系の人かと思つてたよ。

「ひ、引きこもりじゃねえし！　ちゃんと外で働いてるから！」

うん？　まあ、働いてるのは知ってるけど、何故にそんなに猛烈なアピールを。

「…………う、いや、何でもない。しかし、流されてめぐみんの事を仲間にしてしまったが…………正直なところ早まった感が否めん」

「よく分から無いんだけど、仲間が増えるのはいい事だろ」

「それが普通の奴だったらな」

何やら疲れきった顔をしてるなあ。いっぱい苦労してるのかも知れない。

「…………そう言えば、お前もこの世界で生きて行くつもりなら冒険者になった方が良いんじゃないか？　身分証みたいな物も貰えるし」

そう言いながら、カズマくんは懐から一枚の金属板を取り出した。簡素な作りだが、金目の物なんだろうか？

くれるの？　と聞いたら『やらねえよ！』と怒られた。

「コレは俺の冒険者カードだ。ステータスとか職業なんか書かれてる。新しいスキルの獲得なんかも、このカードでやるんだぜ。…………まあ、手に入れるには1000エリスが必要なんだけだな」

金が掛かるとか…………ある意味では当たり前なんだろうが、世知辛

い。今の俺は文無しだと思っし。何かしら、金目の物とか持ってないだろうか？

「あ……同じようなカードがポケットに入ってる」

「はあ!? 冗談だろ?」

此方へ乗り出しながら疑うカズマくんへ、『ほら』とカードを見せる。

多分、この世界に来る時にサービスでくれたのだろう。

「ずりい……」。俺なんて役に立ちそうに無い女神だけしか貰ってないってのに。アレか？ 俺の勘違いなだけで、本当は転生した人間じゃないのか……?」

カズマくんが少しばかり気になる事を口にするが、今の俺は自分の冒険者カードに夢中なので敢えて無視する事にする。

カードは版面を手で触れると反応する不思議な板で、俺の名前だけではなくステータスと思われる数字も記入されていた。

もつとも、所持スキルに関しては『魔法(?)』なんてモノしか無かったが。

「ちなみに、お前は何かスキルが使えるのか?」

「まあ、『魔法っぽい何か』を少し——」

「——済まない。少し良いだろうか」

と、不意にだ。俺とカズマくんの会話に横槍が入った。

視線を向ければ、そこにはスタイルの良い金髪の女性騎士が強い視線をカズマくんに向けている。

うーん。なんだろうか。カズマくんちよつとだけ嫉妬ジエラシーを感じてしまう。